銀夜のホワイト・レイヴン

LOREX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀夜のホワイト・レイヴン

【Ｎコード】
Ｎ７３９２Ｙ

【作者名】
ＬＯＲＥＸ

【あらすじ】
この世には死を怖がる者もいれば、逆に憧れる愚者がいる。ある時突如湧き上がってきた意味不明な殺意によって父親を殺した姉は、罪を犯したことに酷く心を打ちのめされて家を出て行ってしまう。そんな姉が残していった、黒金色の拳銃「ハンドガン・モルス」。人間の心――その陰の部分に潜む”死神”。人は皆、死神を心に持っている。死の概念を具現化した存在が、心の中を蠢いている。貴方に、死の意味が分かりますか？
※ａｍｅｂａブログにて限定公開している作品を加筆・修正

したものです※

＃０１　殺し屋の姉、罰せられた妹（前書き）

※このお話はフィクションです※

#01　殺し屋の姉、罰せられた妹

Ｍｏｒｓ　ｃｅｒｔａ，　ｈｏｒａ　ｉｎｃｅｒｔａ．　……
Ｃａｒｐｅ　ｄｉｅｍ．
（クィントゥス・ホラーティウス・フラックス）

窓から覗く灰色の空。蔓延る雨雲にまるで巻き付くかのように蠢く幾つもの雷鳴が、大きな轟音を上げて地上を揺るがした。それに乗じて、勢い良く振り落ちる豪雨は横向きに吹き荒らされ地面にぶつかり、悪魔の囁きのような音を立てる。

だがしかし、目の前ではそんな音々が全く耳に入らないほどに異常な光景が広がっていた。

徐々に広がっていく赤黒い池。その中央に佇む、残酷な表情をしたまま白目を向いて倒れている男の姿。そして自分の右手には、雷鳴が反射して光る黒金色の、ハンドガン。

――私はこの手で、人を、殺しました。

真っ暗な小部屋にどんどん血溜まりが広がっていく。私の足元は、すでにその池の中だ。片足を上げようとすると、微妙に粘着性のある感触が足の裏から伝わってきて、ハンドガンを握る右手が小刻みに震えてしまう。

その時、また雷が激しく鳴り響いた。きっと私のした事を神様が怒っているんだ。罪を犯した私になんか生きる資格が無いと言って、私を焼き焦がすつもりなんだろう。

そう思った途端に、やっと怖いという感情が心に表れてきた。

目の前で父親が血を流しながら倒れている。その「死体」は、石のように微動だにしない。

しかし不思議と、どうやって父を殺したのかを覚えていない。突然身体中の血液が循環速度を速めて、心臓の音が耳まで届くほどに響き渡っていって、気が付くと私はここに立っていた。

けれど感覚は残っている。自分でこのハンドガンを手に取り、引き金を思い切り引いて父の中心を撃ち抜いたという感覚だけは。だから、殺したのは私なんだ。

でなければ、今目の前に広がっている光景の理由が付かない。

普段から根暗ではあったけれど、遂に私は「人殺し」となってしまったのだ。それも、実父を殺したという罪深い愚者になってしまった。

神様、どうか許してください。私は、血の繋がる父親を殺してしまいました。

「姉さん、どうしたの――」

「……！！」

不意に背後の扉が開かれたかと思い振り返ると、そこには蒼白とした妹の姿があった。

この世の終わりを告げられたかのような、絶望に満ちた顔だった。その位置からだと、小部屋の中央で亡骸と化した父の姿は、真っ先に目に付くだろう。

私は覚束ない足取りで、血の池の上を歩き、愕然としている妹に歩み寄る。ぴちゃ、ぴちゃ、と全く潤いの感じられない液体の跳ねる音が、足の裏から聞こえる。

そしてやっと何が起こったのかを把握出来たらしく、妹は何も言わずにそのままその場に、力無く倒れ込んでしまった。きっと、この血生臭い空気のせいでもあるだろう。私だって、こんなにも鼻を削ぎ落とそうとしてくるような臭いには耐えられない。

「ごめんね……」

けれど人を殺した私はもうここに居られない。ハンドガンには指紋がこびり付いているだろうし、何より今の自分の足は、父の流した血で真っ赤になってしまっている。

今の私の姿は、死神のように見えるだろう。――全ての生命に死を授ける役目を持つ、地獄の悪魔に。
そんな悪魔である自分は、これ以上妹を苦しませてはいけない。そういった理由もあって私は、今すぐここを出て行かなければならなかった。
外は激しい雨、突風、雷鳴。それでも行かなければならない。死神になった私なんて、ここにいる資格は無いんだ。
空の上にいる神様は、私に制裁を下すのだろう。それでもいい。私は裁かれるべきだ。
雷に討たれようが、突風に身体を破壊されようが、豪雨に潰されようが、どうにでもなればいい。それでこの罪が償えるのなら、本望だ。
古時計の短針が”？”を指していたのを見て最後に、その小部屋に振り返って、死んだ父親の顔を拝んでやった。私がどうして殺したのかは全く分からないけれど、とりあえず、ここまで育ててくれてありがとう、と。
果てしなく暗い闇夜の豪雨の中を、私は裸足で駆けていった。突然襲い掛かってきた、不可解な現実から逃れるために。

◆◆◆

世の中が夜中という時間帯になっていた時に私は、街灯も点いていない裏路地を歩いていた。人気はあまり感じられなく、こうして携帯電話を開いていないと辺りがほとんど見えないほどに暗かった。そんな場所のひび割れた道路の片隅で、膝を抱えたまま座り込む少年の姿があったりする。すすり泣いているのか、それともお腹を空かせているのか、小さく口を動かしていた。
こんな寒い風の吹く夜中に、たった一人で一体どうしたと言うのだろうか。
（……帰る場所が、無いのかな）

事実、そうかもしれない。
あんなに小さな子でも、親を失ってしまい、希望を見つめる事をやめてしまったのだったら、こんな寂れた場所で死を待つ理由になりかねない。あの子の今の帰るべき場所というのは、死後の世界なんだろう。
そっと手を差し伸べてやりたかった。けれど、そんな事をして私が何をしてやれるのか。
もっと人望に厚い、優しい人がここを通れば良かったのに。と、そう心に留めておいて、私はそのまま再び歩み始めた。……少年は次の瞬間、ばたっと倒れて、動かなくなった。
やはりそうだった。今更私が手を差し伸べたって、死が少し遠くなるだけだったんだ。生命というのはいつか死んでしまう。それが早いか遅いかというだけの事。
少年はきっと、天に召されるだろう。不幸な運命を歩ませてしまってすまなかった、今度は幸せな生き方をさせてやろう、と神様が慈悲を与えてくださるかもしれない。だから、助けてやるのは私がすべき事ではない。
目を逸らして、ふと携帯電話の左隅の時計を見た。小さく白い文字で『１１：２６』という表示がされている。この時期には、特に寒い風の吹く時間帯だ。
ロングコートの裾を揺らすほどの緩やかな風ではあるけれど、そんな僅かな風であっても寒いものは寒い。
もう、この季節も何回目だろう。私が一人きりになって、どうしたら良いか分からないまま彷徨い始めてから、一体どれだけの時間が経ったのだろう。
私も死んでしまえば、神様がまた別の運命を下さるかもしれない――と、何度そう思っただろうか。何度、自らの額にハンドガンを向けて、自分を殺そうと思ったか。
けれど私は怖いんだ。どうしてもその引き金が引けないまま、今に至る。自身の頭蓋骨を撃ち抜いたとして、それからどうなって死

んで、どうやって神の国へ誘われるのだろうか、などという葛藤が私の手を支配してしまい、引き金を引かせてくれないんだ。
実に皮肉なものだ。自分が死にたいと思った時だけ死は遠ざかり、生きたいと思う者には絶対なる死というものが与えられる。
私が今、そのどちら側に立っているのか。それが分からないままこの場所にいる。

「――待って！」
しばらくそのまま歩いていると、いきなり目の前に銀色のバイクが立ち塞がるように停まり、運転手はヘルメットを外して、茶色の長い髪を垂れ流して見せた。
「あなた、どうしてこの時間帯にそんな平然と動いていられるの？　も、もしかしたら！　大変、すぐ連絡しなくちゃ！！」
突然変なことを聞く女性だなと、呆然としながらその顔を見上げてやった。
こちらを引き止めたわけも話さず、女性はコートの内側から携帯電話を取り出して話し始めてしまった。何やら慌ただしく一方的に話している。相手の人はどんな人か知らないけれど、応対が非常に大変そうだ。
「そう、あなたもあの能力者の一人なのね」
「……？」
わけの分からない言葉を告げると、こちらの有無を言わさずに女性は私を背中から押し始め、無理にバイクの荷台に座らせた。
何が起こって一体これからどうなるのか前も後ろも分からないまま、私を乗せた女性のバイクは、真っ暗闇の中を駆け抜けていった。
――私に「死神」が降り立ったのは、それから数時間後の事だった。

◆◆◆

終わりが来るのは全くの必然なのに、どうしてそこまで怖がっているのだろう。この世に生を受けた時点で貴方が死ぬ事なんて決まっている。そんなの当たり前でしょう。生きる道を往くのなら、その最奥には何があるのか、知っているはずなのに。

本当は分かっているのでしょう。絶対に、今いるその場所と別れなければならない日が来るのを。永遠にそこに留まって生を感じるなんて事は、「命」という脆いものには無理な事なんだ。

生まれてくるものは、必ず滅ぶ。肉体が滅んで目に見えなくなるほどの小さな欠片になって、生き続けている人々からは忘れ去られていく。

そんな道理がこの世にはあるという事を理解しているから、貴方は今を生きているんだろう。

誰にも忘れられたくない。そういった思いが生まれて、初めて人々は死を怖がる。

だがしかし、そんな事を承知の上で、やっと命というものは生まれてくるのでしょう。生きる証を頂戴するには、死ぬという事を承知させて、それで始めて授かることが出来るんだ。

なのにどうして恐れている？

命を授かった者は必ず、その契約を介しているはずだ。その審判の前で頷いたはずだ。

だから、私には、貴方が死を恐れている意味が分からない――。

魂という概念においてもそうだ。

仲間が死んだ後に、ヒトというのは死体を土に埋める。他の生き物からすれば奇妙で不可解な行動だろう。それはヒト意外の生き物に、魂という概念が無いからなのだ。

しかしヒト――すなわち人間には、それがある。

埋めてやる事で土の暖かみを実感させつつ魂を安らかに眠らせてやるのだ。死者の念をこちら側へ干渉させないために。死んだ者と

生きる者の世界は別だと定義しているから、そんな考えが生まれたのだろう。
しかし、死者はそれで報われているんだろうか。
例えば貴方が死んだとして、まだ生き続けている人々との世界を断絶されてしまうんだ。それを考えた時貴方はどう思うだろう。
終わりを迎えた魂は、悲しいんだ。
しかし涙を流す瞳も無い、言葉を訴える口も無い、肩を叩いて気付かせる手も無い、「行動」をするための肉体が無い。
肉体を求めて、死者の魂はこちらの世界に足を踏み入れてくる。生きている人々は、それが怖いんだ。だから死者の世界を設けてこちら側とは断ち切っている。

人間というのは、最大的に自分勝手なんだ。
先ほどまで生きていた親友が、幽霊となって出てくると、怖がって顔を青ざめる。そして無理やり払いのけようとする。死んだ今でも、まだ一緒にいたいだけなのに。
やはりそうなんだ。
人間は「命」を授かった時、審判にウソを吐いたんだ。
死ぬのが分かっていながら、死ぬのが怖い。そんな自分勝手を貫き通そうとしている愚者だ。そんな愚者で覆われたのが、この星。審判はどう思いながらこの星を見ているだろう。
だけど私はウソを言わなかった。私は死ぬ事なんか怖くない。
そんな愚者になんかならない。命は絶対に滅びるものなんだ。絶対に誰の目からも見えなくなって、消えていってしまうものなんだ。
私はそれを、分かっている。死を恐れている貴方とは違う――。

◆◆◆

とてつもなく、居心地が悪い。
あちらこちらからと視線を浴びせられて、どうも落ち着かない。

真新しい紺色の制服にグレーのスラックス、またはスカートという周囲の人たちから見れば、明らかにこちらが浮いてしまうのは分かっているのだけれど。
「いちの、エフ……」
手渡された用紙の中に自分の名前を見つける。
上から数えて十七番目。真ん中より少し上のところにあった。

月伽（げっとぎ）学院高等部。
その珍しい構造の校舎は、「満月の日時計」という通称がある。建物に注ぐ、満ちた月の光による影で、時刻を判別できるのだ。そのため校舎の周りには、時刻を報せるローマ数字が十二個彫られてある。もっとも満月の見える時間帯というのは夜に限るのだが。
そして今立っているこの場所は、校門をくぐって昇降口へ向かう間の広い道。
足元にある数字は「?」。満月の夜にはきっとこの場所にも影が差すのだろう。そこから歩いて三十歩ぐらいの所に、隣の数が同じ様にある。
ただ単純に、不思議な雰囲気の学校だ。
校舎に近づくたびに鼓動が高鳴る。
いや、これは「胸騒ぎ」と呼ぶのが相応しいのかもしれない。
確かに視線が気になって仕方が無いのだが、それとは別に落ち着きを保たせない何かが、ここにはある――気がする。

ぱた、ぱた、と上履きがリズム良く床を叩く。
日時計と呼ばれるほど縦に長い校舎だけあって、廊下は極端に短い。一つのフロアに教室が五つという内部構造。本当に変わった校舎だな、と新鮮味も少なからず感じている。
「いちの、……エフ」
エレベーターを六階で止めて少しの場所。『1ーF』と書かれた札が、頭の斜め上にあった。用紙を再度確認してからその教室へ足

を踏み入れる。
既に何人かの生徒が中にいた。――当然の事ながら、注目される。
なぜかというと、今身に纏っているのは、明らかに周囲とは異なった制服だからである。
黒いブレザーに赤いチェックのスカート。胸にはスカートと同じ色をした六芒星型のエンブレム。そもそもこのエンブレムは、この学院のものではないのだ。
すなわち、周囲から見れば自分は、服装から何から全く違う「別物」だ。
どうして他の学院の人が紛れているのか、どうして彼女だけ制服が違うのだろう、とでも思われているのだろう。校門をくぐった後に周囲から当てられた視線も、全く同じものだ。
しかし、別に着たくて着ているわけではない。
無理やり着せられたのだ。どうしてなのか、訳も聞かせてくれないままに。
ただ一つ言われた事といえば、
「その制服は特別製だからね。あなたを護ってくれるのよ」
投げやりにそう言われただけだった。何が特別なのか、一体何から護られるのか、肝心な部分を全く伝えられなかったのだった。
そのせいでこうして浮いているというのに。帰ったらちゃんと訳を聞こう。

◆◆◆

「指定された席に座りなさいねー。
机の中に必要な個々の書類とか色々入れてあるから、間違いの無いように」
気だるそうにそう言った、この教室の担任となるらしいその先生は、若い女性だった。化粧の乗りが少し濃くて、口紅が深紅に際立っているのがここからでも分かる。

けれど、先生の口紅だけではなくて、相変わらず私も教室の中で際立っている。
集団の中に紛れた異端者のようだった。
良く言えば、砂の城の天辺に刺す、細い木の枝。異様に存在感をかもし出す物体のよう。
「中の書類は一応確認しておいてねー」
先生が必要以上に忠告するのは、それほどに大事な書類でも入っているのだろうか。

がちゃ、がた……。
おもむろに机の中へ手を突っ込む。
すると、貴金属のような触感が手のひらを伝ってきたのだった。
書類が入っているのではなかったのだろうか。机の中で金属の擦れる音がする。右手でそれを覆うように握り締めてみて、初めてそれが何なのかが判別できる。
（銃だ……）
どうしてそうやってすぐに理解出来たのかさっぱり分からないが、指をそのまま動かしてみて、明らかに拳銃の形をしていたのに気が付いた。
この学院は生徒全員に拳銃を配布する校則でもあるのかとあり得ない想像をしつつ、それを机の中で握ったまま教卓に立つ先生の方を見る。
しかし何も不自然な様子は無い。周りの生徒たちも平然と書類を眺め始めている。
皆の視線がこちらを向いていない隙を見計らって、その拳銃を制服のポケットへ押し込む。
新入生がいきなり拳銃などを持ち歩いていては何かと問題があるだろう。
「えー。では入学式の会場へ向かいます。廊下に列作って下さいねー」

僅かに重くなった右ポケットを気にしながら、周囲に感付かれないように教室を出た。

依然として物珍しそうな視線は、私の背筋を突っつく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7392y/

銀夜のホワイト・レイヴン

2011年11月22日02時56分発行